

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：33921

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24730711

研究課題名(和文) 定住外国人の子どもに対するキャリア教育の在り方に関する研究

研究課題名(英文) Career-development for foreign student living in Japan

研究代表者

小島 祥美 (KOJIMA, Yoshimi)

愛知淑徳大学・文学部・准教授

研究者番号：10449473

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：外国人の子どもが「日本社会の一員」として日本で暮らしていくための具体的なキャリア教育の在り方を考察するため、研究と実践からその方法論を明らかにした。外国人生徒が多く在籍する岐阜県内にある県立高校をパイロット校として選定し、同校に在籍する外国人生徒を含むすべての高校1年生を研究対象者としてキャリア教育を実践した。その結果、外国人生徒を含むすべての高校生が参加できるキャリア教育が実践できる方法があること、外国人生徒の興味・関心の高まり、自らの進路設計に大きな可能性を生むことを明らかにすることができた。本研究結果から、パイロット校では次年度から学校(高校)主体で実践することとなった。

研究成果の概要(英文)：Nowadays, this Study "Career-development for foreign student living in Japan" is required more than ever to focus on affected by recession and globalization. Therefore it is important to consider to an academic area realized by the interaction between theory and practice.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育社会学

キーワード：キャリア教育 定住外国人 高等学校 外国人学校 多文化教育 ブラジル人学校

1. 研究開始当初の背景

(1) 2008 年秋の未曾有の経済不況は外国人住民の雇用環境を大きく変えた。保護者の失業により授業料等の支払いができなくなった外国人の子どもたちは、経済的な理由から就学が継続できない状況に置かれたのである。こうした非常事態から、文部科学省が発表した政策のポイントは、グローバル社会における国際人口移動者と教育の在り方を初めて示したものであった。特に、内閣府が2010年8月に発表した日系定住外国人施策に関する基本指針では、「定住外国人を日本社会の一員としてしっかりと受け入れていくべき」とし、外国人住民の捉え方が明文化されることで、外国人の子どもの教育支援にかかわる今日的課題が明確となった。つまり、外国人の教育支援においてこれまでの研究とは大きく異なり、「定住外国人を日本社会の一員」と捉えたグローバルとローカルの複眼的思考による研究が強く求められていると考えることができる。

(2) 一方で、日本に暮らす外国人の子どもは未だ就学義務の対象でないため、国内には不就学の外国人の子どもは実在する。不就学の子どもへの就学支援体制は国内で未だ確立されていないものの、近年は外国人集住地域では不就学者数の減少を目的とした実践が進みつつある。したがって、定住外国人の子どもの教育支援を考える際は、不就学支援を含む、公立学校および外国人学校における教育支援の在り方についての具体的な実践研究とその検証が重要であると考えられるだろう。

(3) 近年の公立学校における外国人の教育支援の在り方については、公立学校での受入にかかわる研究をはじめ、外国人児童生徒が多く在籍する学校の教育実践研究、外国人の就学扱いを歴史的経緯から問題提起した研究等があるが、「定住外国人を日本社会の一員」と捉えて将来を見据えた教育支援の在り方を示した研究は極めて少ない。

以上のような先行研究を通じて、今日我が国で求める「定住外国人を日本社会の一員」として捉えた定住外国人の子どもの教育支援の在り方として、進路や進学との関係性を踏まえた長期的な支援の在り方を示すことが重要であると考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、定住外国人の子どもに対するキャリア教育の在り方である。外国人の子どもが「日本社会の一員」として日本で暮らしていくための具体的なキャリア教育の在り方とその方法論を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 具体的なキャリア教育の在り方とその方法論を明らかにするため、岐阜県における公立高校をパイロット校として選定し、外国人生徒を含むすべての高校生を研究対象者

としてキャリア教育を実践する。

(2) 高校卒業3年以内の離職率が約3人に1人(35.7%)という現状において、高校在学時に働くことの意義や将来の目標・目的を持つことは、外国人生徒に限らず、すべての高校生にとっての今日的課題である。こうした問題を放置した場合、若者の自殺、不安定雇用による社会不安、生活保護の増大など、さらなる深刻な未来の問題になることは必須であることから、外国人生徒を含むすべての高校生が参加可能なキャリア教育の在り方を検討することで、持続可能なキャリア教育支援に繋がると考えた。

(3) とりわけ、本実践を行う高校が所在する岐阜県は、公立小中学校における外国人児童生徒の増加に伴い、高校進学者は増加しているものの、県内に暮らす外国人労働者の大多数が製造業にかかわる生産工程従事者であるため、限定した職業観の形成しかできない環境に置かれていることやロールモデルがないことなどの理由で具体的な将来の目標や目的を持つことができず、外国人高校生の約半数が中退しているという地域である。そこで、外国人生徒が多く在籍する岐阜県立東濃高等学校(以下、東濃高校と記す)をパイロット校として選定し、県立高校および行政、NPO等と協働しながら、オペレーション・リサーチの手法で調査を実施した。本研究を通じて、実践にあたっての課題を具体的に解決しながら、実際の公立高校で実践できる方法を考察していくという実践的研究を試みた。

4. 研究成果

(1) パイロット校であった東濃高校のすべての1年生104人(うちブラジル人6人、フィリピン人13人の計19人が外国人生徒)を対象とし、全5回・8時間をかけたキャリア教育実践を行った。実践にあたっては、行政と高校と協働し、NPOや地元の企業の協力を得た。

(2) 1グループ5人程度のグループをつくり、グループごとにいずれかのミッションに取り組み、最後に報告会を開催した。ミッションとは、解決ミッションと探検ミッションの2つで、外国人生徒を含む在籍が企業やNPO等が抱える「地域課題」を理解し、その解決策を模索・提案することや、地元企業の現場を見学しながら働く大人本人から「働く楽しさ・やりがい」を感じ取ることにより、自ら就労や進学に対し、具体的なキャリアプランを醸成することを目的とした事項を考案した。

(3) 課題に対して真剣に取り組む姿勢がみられ、審査員による成果発表会では2つの外国人生徒グループが表彰された。とりわけ、実施後に全生徒を対象にアンケート調査を実施したところ、外国人生徒たちは自分たちの取り組みに対して83.1点(100点満点、全体79.7点)と評価し、また外国人生徒の60%

は「またチャレンジしたい」と回答した。

なお、同アンケート調査は本実践体調であった高校1年生104人のうち、100人から得た回答から分析をしたものである(100人の内訳は、日本人生徒が85人、外国人生徒が15人)。

(4)以上から、本実施は、外国人生徒を含むすべての高校生が参加できるキャリア教育が実践できる方法があること、きっかけづくりをおこなうことで外国人生徒の興味・関心の高まり、自らの進路設計に大きな可能性を生むことを明らかにすることができた。これらの成果を踏まえパイロット校であった東濃高校では、同実践が高校主体で次年度以降も継続して実施されることとなった。

(5)本研究の総評として、本実践にあたって協働した岐阜県国際戦略推進課の担当者からコメントをいただいた。以下、全文を示す。

多文化共生を推進する自治体においては、言葉の壁、制度の壁等に直面する外国人を「支援する」という概念において施策が展開されているところであるが、当プロジェクトにおいては外国人生徒のみを対象とせず、日本人生徒とともに隔たりなく実施することにより、外国人が持つ気質がより秀でた形で顕著にクローズアップできるのではないかと、事業企画時点から想定していたところである。

実際に関係する皆様方の知恵・労力を集結した形で、短い時間ながらプログラムを実施したところ、想定以上の外国人生徒の発想・着眼点の素晴らしさが関係する皆さん方の印象として残ったと思われる。

今回が初めての試みであり、地域にて学ぶ外国人と地域企業がお互いに知り合うきっかけとなったことは極めて意義のあることであり、今回の事業の反省点を今後の継続的な事業に反映させ、地域との一体感を外国人生徒に体感していただくことにより、彼らの「地域への愛着」が根付き、ひいては地元企業に就職を希望するといった気運が高まることこそ、外国人と共に進める地域社会づくりに寄与するのではと考える。

(6)その他、前述のパイロット校が所在する岐阜県内に在る外国人学校において、キャリア教育にかかわるアンケート調査も実施することができた(各種学校の認可を取得しているブラジル学校2校において、1校は9年生と高校1年生を、もう1校では6~9年生と高校1~3年生を対象に、調査票を用いて基礎調査の実施)。さらに、三重県松阪市教育委員会の協力を得て、近年国内の公立小中学校に増加するフィリピン人児童生徒について、アイデンティティ支援からキャリア教育の在り方を考えるため、フィリピンの現地の大学との交流プログラムを実践した。これらの成果から、「定住外国人を日本社会の一員」と捉えるなかでのキャリア教育の在り方について、アイデンティティ支援を含めた

キャリア教育実践の重要性や外国人生徒を取り巻く地域社会へのアプローチの必要性が明らかになり、今後の研究課題が明らかになった。今後はこれらの成果を生かした実践的研究に取り組んでいきたい。

なお、本アンケート調査の結果については、岐阜県外国人青少年支援者連絡会議をはじめ、各関係者と共有し、ブラジル学校生のキャリア支援の在り方を検討するための基礎資料として活用しながら、具体的支援の在り方について提案していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

小島祥美、外国人児童生徒の教育を支える様々な連携、国際人流、査読無、324巻、2014、21-27

小島祥美、外国人の高校入学者選抜をめぐる自治体間比較、移住労働者と連帯する全国ネットワーク情報誌・Migrants Network、査読無、168巻、2014、14-15

小島祥美、外国人生徒のキャリア形成とボランティア - 高校進学をめざす外国人生徒が置かれた教育環境、ボランティア学研究、査読無、14巻、2014、3-11

渡辺マルセロ、オチャンテ村井ロサメルセス、オチャンテ村井カルロス、小島祥美、外国人高校生を応援する仕組みづくりへの挑戦-NPO法人Mixed Roots×ユース×ネットこんぺいとうの実践報告、ボランティア学研究、査読無、14巻、2014、43-54

小島祥美、ブラジル学校における学校健診の試み、保健の科学、査読無、56巻、2014、250-254

山崎嘉久、小島祥美、学校健診が行われていなかったブラジル学校、小児科診療、査読無、76巻、2013、937-942

〔学会発表〕(計3件)

小島祥美、外国人生徒に対するキャリア教育の試み-岐阜県立高校および松阪市教委と連携した実践からの学び、国際ボランティア学会第15回大会、2014年3月1日、早稲田奉仕園(東京都新宿区)

小島祥美、高校進学を希望する学齢を超過した義務教育未修了の外国人住民が置かれた教育環境、異文化間教育学会第33回大会、2012年6月9日、立命館アジア太平洋大学(大分県別府市)

小島祥美、山崎嘉久、長嶋正實、野村美智子、ブラジル学校における日本の学校健診モデル適用の可能性 - 他校でも応用可能な学校健診の手法の開発をめざした実践から、第59回日本学校保健学会、2012年11月10日、神戸大学(兵庫県神戸市)

〔図書〕(計2件)

内海成治・中村安秀編(小島祥美他) 新ボランティア学のすすめ(仮称) 昭和堂、2014、総数未定(138-154、予定)

咲間まり子編（内田千春、小島祥美、駒井美智子、佐藤千瀬、品川ひろみ、菅原雅枝、石曉玲、中野明子、林悠子、韓在熙、堀田正央、松山有美、三井真紀）、みらい、多文化保育・教育論、2014、151（52-59、69-74）

〔その他〕

ホームページ等

「定住外国人の子どもに対するキャリア教育の在り方に関する研究」報告書（2014年3月発行）

<http://www2.aasa.ac.jp/faculty/education/news/kojima/houkokusho2013.pdf>

キャリア教育プログラム実践の記録 - 東濃高×地域のコラボによる地域活性化プロジェクト（2014年3月発行）

http://www2.aasa.ac.jp/faculty/education/news/kojima/career2013_omote.pdf

http://www2.aasa.ac.jp/faculty/education/news/kojima/career2013_naka.pdf

6．研究組織

(1)研究代表者

小島 祥美（KOJIMA, Yoshimi）

愛知淑徳大学・文学部・准教授

研究者番号：10449473